

教 仏 庵 草

第154号
(発行日)
2003年4月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyoun3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》
* 同朋の会 (念佛寺)
毎月22日午後2時
.....
* 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
* 8月の同朋の会は休会

往生とは何か

F 「真宗の教えでは浄土往生とか往生浄土ということがよく言われますが、往生というのがよくわかりません」

D 「往生を理解するにあたって、まず往生は浄土とセットになっている言葉ですから、浄土と切り離して往生をうんぬんすることはできないのです」

F 「往生という言葉の意味は？」
D 「往生は名詞というよりは動詞または動名詞と理解すべきで、往は往く、生は生まれるで、ゆき生まれること、浄土に行き生まれるのを浄土往生あるいは往生浄土と、私はいただいています」

F 「このことが真宗では大変大事なことなのですね」
D 「ええ、浄土に行き生まれる道が、この世の全体から私が救われる道であるとともに、この世が救われていく道になっていくのです」

F 「浄土へ往くというのは浄土に向かっているということですか」
D 「そうですね」
F 「だれもかれもが浄土に向かって行っているのですか」
D 「そうはいわれておりません。すべての人は浄土の働きを受けていますが、浄土の働きである

弥陀の本願力に気がつき、本願力に身をゆだねた人は正しく浄土に向かい、浄土に生まれることの定まった人たちの仲間に入ると教えられています」

F 「浄土は働きのですか」
D 「浄土は浄化されたさとり領域であるとともに、穢土を浄化する働きです。穢土を浄化するのは具体的には、人の罪を知らせ、浄土へと助けと導き、罪を浄化しようとする大悲の智慧の働きです」

F 「そうすると往生の往は往くあるいは往きつつある。行きつつあるということ、目的地までのプロセスといえないでしょうか」
D 「そうですね」

F 「浄土へのプロセスはいつからはじまるのですか」
D 「先ほども申しました浄土の働きに気がつき、浄土の働きにおまかせする時からといわれています。それを信の一念といえます」

F 「信の一念とは」
D 「信とは浄土の働きである弥陀の本願力を信受すること、一念とは初めての心で、信の一念とは信心が初めて起こった時のことをいいます。信心が初めて起こった時に浄土へ往くことが決定するといわれています。以

後はもはや浄土への道から離れることも退くこともないので、《不退転の位に定まる》ともいわれます」

F 「その時から確実に浄土に行くプロセスに入ったということですか」
D 「そうですね」
F 「では、往生の生は？」
D 「まさしく浄土に生まれることです。浄土に生まれると涅槃のさとりを開いて仏になると仰せられています。ですから浄土に生まれることと仏になることは同時なのです」

F 「そうすると浄土往生というのは、浄土に向かって行き、人生の最後に浄土に生まれる、すなわち仏になる、ということですか」
D 「そうですね」

F 「浄土往生の全体が浄土真実の働きであるといわれています」
F 「浄土は私たちにとっては未来に生まれるべき世界であると共に、現在すでにその浄土の働きである本願力の中にあるのですね」

D 「ええそうですね」
F 「浄土往生を何かにたとえてください」
D 「よくたとえられるのは、船

《弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覚月すみやかにあらわれ(仏になる)》

とあります。あるいは聖人の『高僧和讃』に

《生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける》

とあります」
F 「海に沈んで苦しんでいる衆生を、船に乗せて、向こう岸にわたすというたとえですね」

D 「そうですね。迷いの苦しみの世界を苦海にたとえています。その苦海にアップアップして苦しんでいる私たちに、浄土の世界から浄土の働きが助け船となつて来てくださり、私たちに船から喚びかけてくださる。それが南無阿弥陀仏のお名号です。

『正像末和讃』では
《弥陀観音大勢至
大願のふねに乗じてぞ
生死のうみにうかみつつ
有情をよぼうてのせたまう》

とあります。浄土の大悲の働きはすべての人々に働きかけて喚びつづめに喚んでくださっています。けれども私たちはそれに気がつかないのです。ところが南無阿弥陀仏のお名号となつて喚びつづけてくださる大悲のご念

力によつてようやく弥陀の本願に気づき、《乗れよ必ずわたすべし。乗れよ助ける》と仰せくださる大慈大悲の仏心に驚いて、弥陀におまかせをする、それが願力の船に乗せていただくことなのです」

F 「本願を信じることは阿弥陀

様の船に乗るようなものだと
いうことですね」

D 「そうです。聖人はそのこと
に関して、

《大悲の願船に乗じて光明の広
海に浮かびぬれば、至徳の風静
かに衆禍の波転ず》

といわれています。弥陀の願船
に乗れば、苦海はその意味を転
じて光明の広海となり、弥陀の
本願に生かされることによって、
苦しみ悩みの人生生活（苦海）
が落ちついた有り難い人生生活
に転じられてくるのです」

F 「そういう人生生活が浄土へ
往生生まれる人生というのです
ね」

D 「そうです。こうした浄土へ
生まれゆく人生が信心において
定まるです。これが非常に大事
なこと、親鸞聖人はお手紙に
《信心のさだまるとき、往生ま
たさだまるなり》
と仰せられています」

*
F 「浄土へ行く人生は浄土への
航海ということですが、そうす
ると浄土に生まれるというのは
当然、向こう岸に到着したこと
をいうのですね」

D 「そうなります」

F 「それはいつですか」

D 「この世のいのちが終わった
時といわれます」

F 「死んで浄土に生まれて仏に
なるのですね」

D 「そういわれています」

*

F 「どなたかのお話で、信心を
いただいた時、すでに浄土に生
まれたのだという話を聞いた
ことがあります、どうなんで
しょうか」

D 「間違いとは言えませんが、
念佛生活の実感からいささか
離れているように思います。信
心をいただいたのだから今す
でに浄土に生まれたのだというの
は、有り難さはかえって乏しい
です。むしろ（浄土に生まれさ
せてくださることよ）と、やが
て与えられる恵みと聞かせてい
ただくことの方がずっと有り難
く感じられます」

F 「阿弥陀の本願にであつたこ
とは、すでに浄土に生まれたこ
となのだという言い方は、ただ
し間違いではないのですね」

D 「間違いではないと思います。
たとえば他宗では人は本来仏な
のだとか、この娑婆はそのまま
浄土なのだという表現もありま
す。これも間違いではないです。
よう。道理として、原理として、
そういうことはいえるわけです。
ただそういう言葉が私たちの生
活実感になるかという、どう
でしょうか。人様のことはしば
らくおいて、私は、現在すでに
浄土に生まれているという思い
で日常生活を生きているわけでは
ありません」

F 「そうしますと、本願を信じ
る時、浄土に生まれたのだとい
われるよりも、浄土に生まれさ
せていただくのだという方が実

感的に大変有り難いといわれる
のですね」

D 「ええ私はそう感じています」

*

F 「聖人のお言葉に往生の言葉
を、この世で信心が発起し人生
を送る場面で使われる場合と、
死して浄土に生まれる場面で使
われている場合とがあるように
ですが、それはどうしてですか」
D 「それは浄土へ往生すると言
う言葉が、浄土へ行くという
（往）に重点をおいて語られる
場合と、まさに浄土へ生まれる
（生）に重点をおいて語られる
場合とがあるからではないでし
ょうか」

F 「聖人のどういいうお言葉です
か」

D 「たとえば、唯信鈔文意に
《信心を得ればすなわち往生す、
すなわち往生すというは不退転
に住するをいう》
とあります。この場合の往生は
浄土へ生まれることからもはや
退転しない、かならず浄土へ生
まれることが定まることを（往
生す）と經典に説かれたのだと、
説明されたお言葉です。

《また明法房の御往生のこと
をまのあたりにきき候》
というお手紙での（往生）はこ
の世のいのちが尽きて浄土に生
まれたことをいわれています。
そのほか、殆どの往生は（浄
土へ行き生まれる）という全体
を往生の言葉で語られます。な
ぜなら浄土へ行くことと生まれ

ることとは一連のことだからで
す」
F 「やや難しくなってきました
が、浄土に往生していく姿はわ
かりやすくいえば、阿弥陀様の
船に乗せられて浄土の岸に向か
っている状態というわけですね」
D 「そうなんです、だから海に
浮かんで漂（たな）っている状態でもな
ければ、船から下りて向こう岸
についてしまっている状態でも
ない。中間時なのです」
F 「そうすると、船に乗ってい
る状態の時に浄土に生まれたと
いうよりは、（浄土にかならず生
まれさせてくださる）というの
がびつたりするのですね」
D 「ええ、そうです。もう一つ
たとえられるのは、どこかの国
で弾圧があつて、弾圧された人
がアメリカ大使館へ逃げ込んで
アメリカ行きが許可された時、
アメリカ大使館は治外法権でア
メリカの法律が適用されますの
で、もはやその国でありながら
その国ではない。この人はかな
らずアメリカに行けることが決
定し、その国に支配を脱してア
メリカの支配の中にあります。
こういう状態の時、アメリカ大
使館に逃げ込んだ人が（私はア
メリカにきた）と言えなくはな
いけれども、（私はかならずアメ
リカ本土に行ける身になった）
というのが実際的な実感ではな
いでしょうか」
F 「そうですね」
D 「言語表現にも、間違いでは

ないけれどもびつたりしない表
現もあれば、びつたりと合う表
現もあります。真宗の教えをど
う表すかは、お念仏の生活感情
に合うか合わないかを私は一つ
の目安にしています」

F 「浄土教はそういう宗教感情
を大事にするのですね」
D 「そう思います。お念仏が身
に付くというのは弥陀の本願が
生活感情まで具体化することで
すから。ことにお念仏を称える
ことなどはせずに親鸞聖人の教
えを思想的・哲学的に把握しよ
うとする知識人たちは、死後に
浄土に生まれるということを否
定的に考えていますから、浄土
往生をすべてこの世でのことに
のみ解釈してしまいます。いわ
ば現代の思想感覚で聖人の書か
れたものを読み込んでしまうの
です」

F 「現代の思想感覚でのみ教え
を解釈すると聖人のお心とはず
れてくるのですね」
D 「そう思います」

(了)



葉蘭

歎異鈔 第十三章第二講

また、あるとき「唯円房はわがいうことをば信ずるか」と、おおせのそうらいしあいだ、「さんぞうろう」と、もうしうらいしかば、「さらば、いわんことたがうまじきか」と、かさねておおせのそうらいしあいだ、つつしんで領^{りやうじやう}状もうしてそうらいしかば、「たとえば、ひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし」と、おおせそうらいしとき、「おおせにてはそうらえども、一人もこの身の器量にては、ころしつべしとも、おぼえずそうろう」と、もうしてそうらいしかば、「さてはいかに親鸞がいうことをたがうまじきとはいうぞ」と。「これにてしるべし。なにごとまころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといわんに、すなわちころすべし。しかれども、一人にてもかかないぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。わがころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」と、おおせのそうらいしは、われらが、ころのよきをばよしとおもい、あしきことをばあしとおもいて、願の不思議にてたすけたまうということをしらざることを、おおせのそうらいしなり。

(歎異鈔第十三章)

現代語訳

(またあるとき聖人が、「唯円房はわたしのいうことを信じるか」と仰せになりました。そこで、「はい、信じます」と申しあげると、「それでは、わたしがいうことに背かないか」と、重ねて仰せ

なつたので、つつしんでお受けすること
を申しあげました。すると聖人は、「ま
ず、人を千人殺してくれないか。そうす
れば往生はたしかなものになるだろう」
と仰せになったのです。そのとき、「聖
人の仰せではありませんが、わたしのよう
なものには一人として殺すことなどでき
るとは思えませんが」と申しあげたところ、
「それでは、どうしてこの親鸞のいうこ
とに背かないなどといったのか」と仰せ
になりました。

続けて、「これでわかるであろう。ど
んなことでも自分の思い通りになるのな
ら、浄土に往生するために千人の人を殺
せとわたしがいったときには、すぐに殺
すことができるはずだ。けれども、思い
通りに殺すことのできる縁がないから、
一人も殺さないだけなのである。自分の
心が善いから殺さないわけではない。ま
た、殺すつもりがなくても、百人あるい
は千人の人を殺すこともあるだろう」と
仰せになったのです。このことはわたし
どもが、自分の心が善いのは往生のため
によいことであり、自分の心が悪いのは
往生のために悪いことであると勝手に考
え、本願の不可思議なはたらきによつて
お救いいただくということを知らないで
いることについて、仰せになったのであ
ります)

*

聖人はあるとき唯円房に「私の言うこ
とに背かないのなら、じゃあ人を千人こ
ろしてくれないか。そうすれば往生は確
かなものになるだろう」と仰せられたと、
唯円房はここでのべています。聖人のこ
こでの仰せの意図は、善悪の行いはその
つどの自分の意思で自由に行えるもので
はないこと、だから自分のなす善悪の行

いでもって我が身の往生の可否が決まる
と思うのは、我が身が宿業に縛られてい
る不自由な存在であるということを知ら
ないからだ、そう教えられるのであり
ましょう。

*

聖人が唯円に「往生のために人を千人
殺せ」といわれて、唯円は「私には一人
も殺せそうにありません」とこたえまし
たが、聖人は「それは、現在とはという条
件のもとであつて、もし時と場所と状況
が違えば殺すこともある。宿業の身で
あるわれらは、殺すほどの縁が今は来て
いないのだけであつて、縁さえ来れば、
殺したくないと思つても殺してしまうで
ある。われらは宿業の深い、危険で不
自由な身である」という自覚(機の深信)
をここで語られたのだと思います。

この話について思い出されるのはアン
グリマラーという釈尊のお弟子の話で
す。

アングリマラーに関しては『鶯峯摩(ア
ングリマラー)経』という經典に出てい
ます。

それによりますと、

『釈尊のおられた頃、シュラバステイー
の都にバラモン教のグル(師)がいて多
くの弟子をかかえていました。その中に
アヒンサカというまじめな求道の青年が
いて、体力強く才知もあつた素直で美し
い若者でした。ある日、師の妻が夫の外
出時に、かねてから恋慕の思いを抱いて
いたアヒンサカに近づいて、「楽しみま
しよう」と誘惑しました。驚いたアヒン
サカは「師は父に当たり、夫人は母のよ
うなものです。道ならぬことは心苦しい
極みです」と断りました。その時に、
師の妻は「飢えたものに食物を与え、の

どの渴いたものに水を与えるのがなぜに
道ならぬことであろう」と言い寄りまし
たが、アヒンサカは「師の愛する夫人と
なれ合うのは、毒蛇を身体にまとい、毒
を飲むのとかわりがありません」と断わ
りました。夫人は仕方なく自分の部屋に
帰りました。けれども屈辱をうけた恨
みを晴らそうと思ひ、自ら着物を引きさ
き、色ざめて寢床にふし、夫の帰るのを
待ちうけて「私はあなたの弟子のアヒン
サカにはずかしめを受けました」といつ
わつて泣いて訴えました。夫はこれを聞
いて嫉妬の炎でむねを焼きました。しか
し、力でもつてアヒンサカをこらしめる
ほどの体力をもつていなかったため、ア
ヒンサカに罪を作らせて地獄に落として
やろうと一計を案じ、彼に「お前の智慧
はもう奥に入つていっているが、ただ最後にな
すべきものが一つ残されている」と語り、
剣を与えて「これをもつて四つ辻に立ち、
百人のいのちを断つて、その指を切り取
つて百指をつないで首飾りにせよ、そう
すれば真の道はそなわるであろう」と言
いつけました。アヒンサカは大変驚き、
師の教えに順うべきかどうか、大変悩み
ました。そのためとうとう精神的に混乱
し平静を失つて、四つ辻に立つてしまつ
たのです。彼の苦悩は激しい怒りに変わ
り、眼血走り、髪の毛は逆立つて、呼吸
は荒れ、思わず道行く人々を襲い切り倒
していききました。それはまさに鬼のよう
でした。そのようにして切り取った指を
集めて首飾りにしました。村人たちは恐
れ、彼をののしり怨みました。彼は
頓着しませんでした。そうして9人を
殺し9の指を集めて、あと一人の指を求
めて、四つ辻に立つていました。その時
ちようど、彼を哀れに思つて釈尊がやつ

て来られました。彼は釈尊を殺そうとおそいかりました。逆(さか)に釈尊に論(ろん)され、悪夢(あくむ)から覚(さ)め、剣(けん)を捨てて地にひれ伏(ひた)し、「世尊(よせそん)、どうぞ私のあやまちをおゆるしてください。私は指を集めて道を得ようと思いました。私を済(す)うてお弟子の数にお加え下さい」と懺悔(ざんげ)し懇願(こんがん)しました。このようにして彼は釈尊のお弟子となり、修行に励んで、ほどなく浄らかな悟り得ました』

*

このような話が経典に伝わっています。アヒンサカというのがアングリマラーのことです。この話の中でアングリマラーのグル(師)が「百人のいのちを断つて、指をつないで首飾りにせよ、そうすれば真の道はそなるであろう」といった話と、歎異鈔で「ひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべし」とはよく似ています。

その時、唯円房は「今の私には一人も殺せるとは思いません」と申しました。それには「聖人のお話は「自分が悪をしたくないと思うからしないでおれるのではない、したくなくても縁がくれば多くの人を殺しかねないのが宿業の凡夫である。自分で自由に悪がやめられ善を行えるような存在ではない。縁がもよおせばどんな残酷なことをしてかすか分からない自由で危険な存在である」との思召しとうかがわれます。

これは客観的な第三者的な人間観ではなくて、自分のありさまを法に照らされ、教えられて感知された我が身の姿・宿業の身の実感(まじかみ)いわば「機の深信」をこの歎異鈔の一節から教えられます。

*

この話はオウム真理教事件のことと重

なります。もともと素直で才知のあるアングリマラーが師の命(めい)に順(したが)って、多くの人を殺害しましたが、オウム真理教の信者の一部は教祖の命に順(したが)って、「人をポアすること」があたかも道にかなうかのように思(おも)って多くの人を殺害(ころ)しました。今や彼らは社会から極悪人と批判されていきますが、もともと私たちとかわらぬ普通の人だと思(おも)います。しかし、師を誤(まち)ってしまった因縁(いんげん)によって殺人(ころ)という悪業(あくごう)を犯(と)し、つかまつて死刑を求刑(せうけい)されています。私たちもし悪しき縁(えん)にであらうと同じことをしてかさないともかぎらないのです。いわば私たちは業縁(ごうげん)に動かされる存在(존在)であり、危険で不自由な存在であることを、この歎異鈔の言葉(ことば)によって知らされます。

アングリマラーは幸(さい)いにも釈尊(しやくそん)にであらう、釈尊の慈悲(じひ)によって修行者(しゆぎやう)仲間(なかま)に入(い)れることが出来(こ)ましたので、牢屋(らうゑ)に入れられることをまぬがれ、そればかりか修行(しゆぎやう)によつてさとりを開(ひら)きました。オウム真理教(りんぎやう)の彼(かれ)らは社会(しゃかい)の刑法(けいぽう)をまぬがれることが出来(こ)ず、死刑(せいちやう)を求刑(せうけい)されています。本當(ほんたう)に不幸(ふこう)なことです。もし正しい善知(ぜんち)と教え(おしえ)に恵(めぐ)まれたなら、人(ひと)として尊(たう)い人生(じんせい)を送(おく)れるかも知(し)れません。(なお、私は死刑(せいちやう)には反対(はんたい)です)

*

余談(よだん)ですが、この鴛鴦(うぐいす)摩經(まきやう)の教説(きやうせつ)の中で、グルの妻(つま)が彼(かれ)に言(い)い寄り、「正(ただ)しからざる楽(たの)しみを得(え)ようとした」とありま(す)。いわゆる不倫(ぶりん)です。そして誘惑(ゆうわく)を断(き)ったアングリマラーに対して、彼女(かの)は「飢(う)えたものに食物(じよく)を与(たま)え、のどの渴(かわ)いたものに水(みづ)を与える(たま)うのがなぜに道(みち)ならぬことであらう」と言(い)います。

「あなたが私の渴(かわ)きをいやすのはなぜ

悪い、かえって良いことではないか」というようないいぶりは、援助交際(えんじゆこうざい)をしてお小遣(こづか)いを稼(かせ)いでいる女の子(おんなこ)が「お互(たが)いに楽しんで何が悪い(わるい)。だれにも迷惑(めいわく)をかけた(か)けない」という言(い)い分(ぶん)と同質(どうしつ)ですし、「不倫(ぶりん)がなぜ悪い(わるい)」という問題(もんだい)もあ(ぶ)り出(で)してきます。こういう性(せい)の倫理(りんり)については今日(こんにち)でも納得(なつと)のいく道理(だうり)があ(あ)きらかにな(な)っているとはい(い)えませ(せ)ん。仏教倫理(ぶつぎやうりんり)の点(てん)から今後(こんご)も課題(かたい)にしたいこと(こと)です。

*

ただアングリマラーが師(し)の妻(つま)から誘惑(ゆうわく)され、しかも彼女(かの)から激(げ)しい恨(うら)みを買(か)ったというこ(こ)とは、彼(かれ)にもそうなるよ(よ)うな種(たね)(宿因(しゆくいん))があ(あ)ったとも言(い)えます。そのこ(こ)に關(か)して鴛鴦(うぐいす)摩經(まきやう)にアングリマラーの前世(ぜんせい)の因縁(いんげん)が次(つぎ)のように説(せつ)かれていま(いま)す。

『昔(むかし)、大果王(たいくわ)という王(わ)に大力太子(たからい)という王子(わうじ)がいま(いま)した。彼(かれ)は女性(にょせい)には見向(みむか)きもせ(せ)ず、30才(さい)にな(な)っても結婚(けつこん)しな(し)なかつたので大王(たいわう)は世継(よせけい)ぎのこ(こ)を心配(しんぱい)して、国中(こくぢゆう)に命令(めいれい)して「太子(たいし)に性(せい)の楽(たの)しみを味(あじ)わ(わ)せる者(もの)がお(お)れば千金(せんぎん)をあたえよう」とい(い)うおふれを出(だ)しました。この時(とき)、男(おとこ)を喜(よろこ)ばせる六十四(むそくじゆう)のテクニク(てくにく)に達(たつ)していた女(め)がいて、大力太子(たからい)にうま(う)く近づ(ちか)づき結(むす)びつ(つ)きました。そののち太子(たいし)は、性愛(せいあい)におぼ(お)れるよ(よ)うになり、ついに国中(こくぢゆう)に「すべ(す)べの新妻(しんさい)の初め(はつめ)の夜(よ)を太子(たいし)ととも(とも)にするこ(こ)と」と命(めい)じました。それで国(くに)の人々(ひと)は太子(たいし)の非法(ひぽう)をい(い)かり、とうとう太子(たいし)をとらえて瓦(わ)や石(いし)で撃(う)ち殺(ころ)してしま(しま)いました。この太子(たいし)の生(な)まれ変(か)わりがアングリマラー(ら)です』

彼(かれ)が性愛(せいあい)におぼ(お)れ、トラブル(たふらぶる)を起(おこ)して殺(ころ)されたとい(い)う前世(ぜんせい)の因縁(いんげん)。その宿因(しゆくいん)をもつてこの世(よ)に生(な)まれてきたこ(こ)がこ

の話(わ)で分(わ)かります。こうい(い)う一つの種(たね)をもつてこの世(よ)に生(な)まれたこ(こ)が、愛欲(あいよく)の誘惑(ゆうわく)にあ(あ)う縁(えん)になり、それが大(お)きな恨(うら)みを買(か)うこ(こ)にな(な)って、自ら(みづか)りも苦(くる)しみつ(つ)いには鬼(おに)のよ(よ)うな悪行(あくぎやう)をしてしま(しま)う、そ(そ)うい(い)うこ(こ)にな(な)ったのだ(のだ)と思(おも)います。それは、この世(よ)で人(ひと)はどうい(い)う目(め)にあ(あ)い、どうい(い)う生(な)き様(さま)をするか(か)には、この世(よ)に生(な)まれる前(ま)の業因(ごういん)を引(ひ)きずつてい(い)るこ(こ)を感じ(か)じさせ(させ)られます。

そういう宿業(しゆくごう)のわれ(われ)ら(ら)を大(お)悲(ひ)し、救済(きうさい)の志願(しぎん)を建(た)てられた(ら)のが阿弥陀仏(あみだぶつ)のご本願(ごほんがん)であり、お念仏(ねんぶつ)でありま(ま)す。

(了)

〈住職(しゆしやく)つれづれ雑感(ざつかん)〉

*アメリカがとうとうイラク(いらく)にたいして攻撃(こうげき)を開始(かいし)した。イラク(いらく)が国連決議(こくれんけつぎ)に何(なん)度も違反(ゐはん)したのでこれ(こ)れは正義(せいぎ)の戦(いくさ)いだとい(い)う、しかしイスラエル(いすらえる)も同(どう)じよ(よ)うに国連決議(こくれんけつぎ)を何(なん)度も破(やぶ)ったけ(け)ど、アメリカ(あめりか)は容認(ようにん)し続(つ)けてきた。「正義(せいぎ)」も利害(りがい)や力(ちから)関係(かんけい)やイデオロギー(いでおろごうぎ)によ(よ)つて曲(ま)げられてい(い)く。

*三月十五日(さんげつじゅうごにち)の開庵法要(かいあんぽうぎやう)はごくさ(さ)やかなもの(もの)にさせてい(い)ただ(た)いた。30名(な)ほ(ほ)どの方(かた)が集(あ)つてくだ(くだ)さ(さ)った。阿弥陀如来(あみだにょらい)様(さま)をお迎(むか)えし、阿弥陀經(あみだきやう)のあと(あと)正信偈(しやうしんぎ)をお勤(まごころ)め、そして松本照曜師(まつもとてうごうし)と松本義明師(まつもとぎめいし)の短(みじ)いご法話(ごぽうわ)をい(い)ただ(た)いた。照曜師(てうごうし)は「儀礼(ぎれい)もつ(つ)ている意味(いみ)」につ(つ)いて、義明師(ぎめいし)は「信心(しんしん)」につ(つ)いて教(おし)えてくだ(くだ)さ(さ)った。法話(ぽうわ)の後(のち)、嶋田君(じまのたか)にご自(ご)身(み)が仏法(ぶつぽう)にあ(あ)われたご縁(ごえん)の感話(かんだ)をして頂(たま)いた。その後(のち)、住職挨拶(しゆしやくあいさつ)、そして責任役員(せきにんやくいん)の山下清人(しみやしみづひと)さん(さん)から祝辞(しゆし)とこれ(こ)れまでの念佛寺(ねんぶつじ)の経過(きやうか)を話(わ)して下さ(下さ)った。あと、軽(かろ)くお齋(おさい)(共食(きんじよく))をい(い)ただ(た)いて散会(さんかい)とな(な)った。ごく小(こ)さな法要(ぽうぎやう)であ(あ)ったが、私(わたし)にとつ(と)つては今後(こんご)の仏教活動(ぶつぎやうかつどう)へのエネルギー(えんえりぎ)をさら(さら)に湧(わ)か(か)して頂(たま)く良(よ)きご縁(ごえん)であ(あ)った。